

(盈進中学校高等学校)

盈進中学校・松葉 滋乃 (まつば しげの)

広島県福山市千田町四八七一四

084-955-2333

タイトル

「大きく息を吸い込む世界へ」



何を話しているのかわからぬ。周りの人  
が怖い。そう感じたことがあつた。

私は6歳の頃から3年間、アメリカで暮ら  
した。生活習慣も言語も違う国で、何もかも  
が初めてで、不安ばかりだつた。英語もまつ  
たく聞き取れず、友だちもできず、孤立した。  
アジア人の私を見て、うわさをしているん  
じやないか。そう思えば思うほど、周囲に話  
しかける勇気を失つた。しかし、現地の小学  
校に通い始めて間もなく、状況が変わつた。

英語ができず、消極的だつた私に、声をかけ  
てくれる白人の女の子がいた。私が寂しくな  
いようにと、自分から日本語を勉強し、たゞ  
たゞしい日本語で話しかけてくれる笑顔の女  
の子。その気持ちがうれしかつた。だから、  
テの子といるのが楽しくて、肌の色や言語の  
違いが気にならなくなつた。そうして私は、  
少しづつ積極的に、周りに話しかけるようにな  
り、英語も次第に使えるようになつた。

家族でラスベガスへ旅行に行つた時、私は

衝撃的な場面に出くわした。私の目の前にいたフードを被つた男性に、いきなり白人男性が暴言を浴びせ、唾を吐きかけた。フードの男性は抵抗もせず、何事もなかつたかのようにそのまま歩いていた。フードの男性は黒人だつた。ひどいことをされたのに不安で、言い返さないのだろう」と思つたが、小学2年生の私はただ怖くて、震えていた。でも中学3年生になつた今、私は思う。あの瞬間、まさに目の前で人種差別が起きていたのだ。人

として許されない差別が。今の私だつたらあの時、唾を吐きかけられた黒人男性に、何と声をかけるだろうか。そして、白人男性に抗議できるであろうか、と。

2020年5月、アメリカで、黒人のジョージ・フロイドさんが、白人警察官による行き過ぎた拘束により、命を落とした。私にラスベガスの記憶がよみがえり、抗議デモなどの報道に接するたびに、胸が締め付けられる自分がいた。警官に9分29秒も首を押さえつけら

れる中、フロイドさんは27回も「息」ができない」と訴えた。袋の中の魚のように、ゆっくりと意識を失つていった。次第に白目になつて、体がぐつになりして命がついに消えた。検察側証人の証言だ。フロイドさんは、この9分間に何を思ったのだろうか。“I can't breathe.” 彼の言葉が私の頭の中で響くたび、私は息苦しくなつた。

私の息苦しさは限界に達しかけていた。そのとき、学校の先輩にその思いをぶつけてみ

た。その先輩は、フィリピン人と日本人のダブルで、生まれつき肌の色が少し濃い。小学生の頃、友だちに「肌が汚い」とからかわれ心に深い傷を負つていた。先輩は、高校卒業後、アイルランドへ留学したが、その矢先に、新型コロナウイルス（COVID-19）の問題が世界を駆け巡つた。その流行は、中国が起源とされたため、アイルランドでは中国人が差別の対象として狙われた。

ある日、先輩は、白人から「COVID-19！」と

罵られ、唾を吐かれたり、石を投げられたりした。先輩は、普段はとてもコミュニケーションで、多様な国籍を持つ友人をもつ。だから先輩は、「自分には人種に対する差別や偏見はない」と思っていた。だが、そのとき、自分の差別化を突きつけられたといふ。「自分が白人から差別されたことにに対する怒りより先に、自分が中国人と間違われたことに對して不快感を覚えた自分がいた。その感情を自覚したとき、自分が一人の人間として

恥ずかしいと思った」と振り返る。この話を聞いて、私は思った。「自分には差別する心はない」と思うことで、差別を見ようとしたない自分をつくっているんじゃないか。先輩の話は決して他人ごとではない。差別は自分の心の中で生まれる。自分にも当てはまる 것이다。自分の心を常に見つける自分でなければ、差別は見抜けない。そう考えられなければ、「私の心はずっと『I can't breathe』のままだ」と。

アメリカでは黒人の人口が白人の約5分の1。だが、新型コロナウイルスでの死亡率は白人よりも黒の方が多い。命に優劣があるではなくないが、アメリカの一部の病院では黒人の患者に対して、治療どころか検査されしてくれないと、現実があるにようである。6歳の私に話しかけてくれた女の子は、「この現実をどうとらえているだろうか。

『Black Lives Matter』確かにそうだ。でも私は「All Lives Matter」（すべての人の命は大切だ）

と訴えたい。フロイドさんが繰り返して「I can't breathe」という魂の叫びといつしょに。誰もが一人の人間として、誰にでも分け隔てなく、他者と対等に向き合い、誰もが自分の言葉で、自分に誇りを持つて語れる日々が来るために。そして、6歳の私に、笑顔で話しかけてくれた女の子のように。I deeply take a breathe and shout my words to the world. 私は大きく息を吸い込み、世界に向こう叫び続ける。「人はすべて平等で、すべての人が生きる権利を有する」と。